佐伯地方の姓氏（九）

――「藤」のつく苗字（その一）――

佐脇　貫一
（会員・佐伯市長良）

佐藤・後藤・首藤など「藤」の字のつく苗字の出自は、だいたい藤原氏であると伝えられている。佐伯地方でもっとも多い「藤」の字姓は佐藤・後藤の両氏であるが、これについては前述した。次いで多いのは安藤氏、以下工藤・加藤・江藤の順になっている。そこでまず安藤氏について記述することにする。

◇　安藤氏と安東氏

「藤」の字が藤原氏裔を現わすものであるならば、安藤氏はことごとく藤原氏（姓）であることを前提にしなければならない。紀伊徳川家の付家老田辺藩（たなべ）祖安藤帯刀直次は藤原姓を称しているが、それには次のような伝承がある。直次の祖父家重から十五代前の祖先は安倍朝任（ともとう）といい、安倍仲麻呂の子孫であるが、朝任のとき鳥羽院より藤原姓を賜わり、安倍と藤原の姓を一字宛とって安藤氏を称したという。（寛政系譜には家重以前の記載がない）

この伝説は安東秋田氏の家伝によく似ている。秋田氏（三春五万石・秋田氏）の祖鹿季は出羽国秋田湊城主で、秋田太郎と称したが、その父は安東貞季と言った。この安東氏は安倍氏族で、前九年の役（一〇五六―一〇六三）に鎮守府将軍源頼義のため討伐された蝦夷俘囚の長安倍頼時（頼良）の子叛将安倍貞任・宗任兄弟の後という。安倍一族は頼義軍のため徹底的に掃蕩されたが、貞任亡滅のとき年わずかに三才であった次男高星は、乳母に伴われて陸奥の藤崎に遁れた。高星の子堯恒（たかつね）は成人して藤崎・安東の地を押領し安東太郎と号したが、その子孫は代々安東太郎を称してこの地を領し貞季に至った。貞季

の子鹿季は秋田湊に進出、湊城に拠って湊家といったが、鹿季の兄盛季は下国家とよばれた。数代の後下国家は絶え、鹿季の裔孫愛季が両家を統合し安東氏の当主となって秋田太郎と称した。これは安東秋田氏の伝承であるが、別本によると安東氏は安藤氏と記載されている。

すなわち安藤氏系図では安倍頼時（頼良）の子に白鳥八郎行任（貞任の弟）があり、その裔季任が安藤太郎と名乗っている。これは季任が実父安倍和任の安倍氏と養父藤原惟平の藤原氏を一字宛とって姓とし、安藤氏と称したものと伝えられている。季任の後は季俊、季信、季村と代々「季」の字を使っており、秋田氏が「季」の字を通字にすることとよく似ている。つまりこの安藤氏と安東氏（秋田氏）は同一氏族であろう。

しかし、安藤氏には藤原氏族のものもある。藤原氏北家利仁流に、河内の坂戸判官則明（後藤氏祖）の子阿閑（あじゃ）梨（り）勝秀の後に安藤刑部亟成忠があり、同じく利仁流斉藤基重の子に安房守基尚があるが、この基尚の後が安房の藤原氏ということで安藤氏を称している。

また藤原氏以外では清和源氏村上氏流、すなわち信濃安藤氏といわれるものに、源頼清の玄孫長基にはじまる安藤氏があり、安藤太郎と号した長基以後、成基（しげ）、基重、業基（なり）と続いている。また『平家物語』には文覚上人の弟子となって仏門に入った平惟盛（重盛の子）の遺児六代御前を捕えた検非違使安藤資兼という者がでてくるが、この冷酷無情な男はどの安藤氏であろう。

安藤と安東は同一氏族に使われることが多いが、とくに安東氏と称するものには桓武平氏良文流、紀臣族平群（へぐり）氏流などがある。なお安藤氏の家紋であるが、紀伊田辺藩安藤氏は「下り藤丸に安文字」、磐城平藩安藤氏は、「藤花輪」と「七引両」になっているが、一般的には「上り藤」「下り藤」が多い。

佐伯地方では全般的に安藤姓が多く、安東姓は数えるほどしかない。佐伯市内の安藤姓は約百二十世帯、各地区に散在している。そのうち聚落的にあるのは堅田・青山地区と大入島地区、また安東姓は七、八世帯にすぎない。郡部はほとんど安藤姓で、うち多いのが直川村と宇目町、ともに三十世帯前後である。

大友義鎮時代の大友家臣団には国衆といわれた緒方一族三十七家と新参衆またはお下り衆といわれた諸氏百五十家のなかに安藤氏があるが、このうち緒方一族のもの

はおそらく大野郡土師郷安藤（大野町）におこった苗字であろう。

旧藩時代の佐伯藩士には安藤氏が三家あった。いずれも中士格であったようだが、各家とも詳らかでない。寛延のころ（一七四八―）堅田郷宇山の村医者に安藤元柳家があった。いまに残る堅田音頭「お為半蔵口説」の主人公半蔵の生家である。安藤元柳は藩医今泉元甫の弟子で、居村宇山に帰り医者となった。口説「お為半蔵」の半蔵は元柳の長男、本名を丹蔵義雄といい父同様今泉元甫の教えをうけてひとかどの医書生であった。この音頭は家門と恋情の板ばさみになった丹蔵が、山伏の娘お民（お為の本名）と心中するまでの悲恋を扱ったもので、四百数十句からなる長音頭である。時は寛延二年（一七四九）六月十一日の未明、所は安藤家の裏山にあたる宇山城趾の城の腰、当時人口に乗った事件であった。安藤家では事件後ほど経て、丹蔵と女の比翼塚を建てたが、いまその墓塚は宇山山麓の同家墓地に残っている。さて、安藤元柳から数代後が元佐伯市長（三代）故安藤正人氏、昭和二十一年三月、阿南卓氏の後をうけて市長に選任され、敗戦の傷手に呆然たる市民を指導、復興への意欲を喚起した。

この安藤氏は系譜によると、大友氏十一代親著（つぐ）の長子孝親（大膳大夫）に出ている。応永三十二年（一四二五）九月、孝親は父親著が家督を十代親世の長子持直に譲ったことが不平で、いわゆる三角畑（大分市古国府）の乱を起した。この戦で誤って父親著を殺した孝親は、持直（大友氏十二代）のため討取られたという。乱後孝親の遺孤は遁れて大野郡安藤（土師郷）に隠れたが、その裔は海部郡堅田郷川井邑に住みついた。これが川井（青山地区）の安藤氏一族で、その宗族の一人が宇山邑に移り医家となった。すなわち安藤元柳家で、元柳は安藤氏の十三代目に当るという。

宇山の安藤氏伝承によると、川井安藤氏とは宗支族の関係にあるが、川井の旧庄屋安藤氏系図は藤原氏北家魚名流で、安房守藤原某を祖にしているようである。前述した利仁流後藤内則明の後安藤刑部亟成忠も、斉藤基重の子安房守基尚も、はっきりした藤原氏族安藤氏の祖であるが、この利仁流というのは藤原北家の左大臣魚名五代の孫鎮守府将軍藤原利仁の系統である。

直川村赤木地区に安藤姓が多いのは、旧藩時代の赤木

〔藤原氏族安藤・加藤・工藤各氏略系〕

藤原北家
▽藤原魚名（左大臣）―鷲取（中務大輔）―藤嗣（参議）―高房（越前守）―時長（中宮亮）―利仁（民部卿 常陸介 鎮守府将軍）―叙用（武蔵守 斉宮寮頭）―吉信（加賀守）―重光（豊後守）―貞正（滝口）―正重（左衛門尉）

伊傳（民部少輔）

修理少進・加賀介
景道（号加藤）―景季（加藤五）―景清（加藤太）―景正（尚景）……
景朝（遠山氏祖）……
（景貞）―加藤次景廉―景長―行景……広兼（三河加藤）―教明（左馬助）―嘉明―明成……（近江水口二万五千石）
景経―景清―景佐―宗景……（美濃加藤）
景義―景定―景春―景平……光長―景泰―光泰（遠江守）―貞泰（左近大夫）……（伊豫大洲六万石）
伊豫介
光員―光兼……（伊勢加藤）

公則―則経―則明（坂戸判官 阿閑梨）―勝秀（律師）―勝命（越後守）―勝尋（刑部亟）―教成（兵衛尉）―成忠（号安藤）―成兼……安藤氏祖
為延―為頼―頼基―基康―基重―基尚（安房守）―基澄（左近将監）
重基……安藤氏祖（左衛門太郎）
三郎・兵衛尉
基氏……安藤氏祖

藤原南家
武智麿四男
▽藤原乙麿（常陸介）―是公……（四代略）維幾―為憲（木工助 遠江権守）―時理―維景……家次―祐次―祐経（工藤氏 左衛門尉）
祐時……（日向伊東氏祖）
祐長（祐盛か）（号工藤大夫）

村大庄屋が安藤氏であったことによるのではないかと思うが、赤木の安藤氏については、佐藤鶴谷外史の『豊後史実辯妄』に吹原富尾社縁起として次の伝承がある。

〔富尾三社大権現〕祭神、姫嶽大明神・佐伯惟治・千代鶴、天文三年九月二十五日創祀、赤木村吹原安藤式部大夫。

天文三年九月、安藤式部大夫の勧請する所なり。安藤の祖先は安藤七郎武連と称し、元日州富高翁ケ岡の城主なりしが、応仁二年の頃、肝付八郎兼重の幕下に属したる時、佐伯山城守惟次肝付一家を討亡し、安藤飛弾守義高日州長江に居城したるを、文亀二年の秋佐伯大膳大夫惟勝が為め擒となられ、爾後佐伯家の客分とし、惟勝の嫡男惟治よりは高恩を受けたるが、義高の嗣子式部大夫浪人して赤木村吹原に居りける時、家祖の恩誼を受けし事を思ひ、惟治のため祠を立て其霊を神と祭りたるなり。

しかし、これはあくまで神社縁起であって史実ではない。従って所々に史実に反する箇所が多いが、それはそれとして、安藤氏の先祖が日向から来住したことは確かだろう。そして富高庄に故地を持つことによって、伊東門川氏に関係のある一族であったといえるだろう。ともあれ安藤式部大夫は吹原富尾社の祠官であるとともに、赤木安藤氏の始祖であった。なお佐伯氏の家臣団には安藤伊織、安藤主税（惟治の家士）、安藤織部、安藤丹波（惟教の家士）らの名が伝えられており、いずれも佐伯氏亡滅後は帰農したと思われる。

往時の赤木村大庄屋安藤氏もこの一族、つまり佐伯氏遺臣の末裔だろう。安政四年二月の大庄屋名簿には「赤木村六百八十石余・安藤佐平」とある。この人はなかなかの人望家で、優秀な村役人だったらしいが、同家の系譜によると、佐平の先代は柳兵衛といい、大庄屋安藤四郎右衛門の同族で小庄屋を勤めていたが、天保九年八月藩命により四郎右衛門の後嗣となり大庄屋を勤めるようになった。柳兵衛時に五十三才だったという。

◇　佐伯の工藤氏は奥嶽工藤の末流か

次は工藤氏である。佐伯地方では佐伯市内（とくに長島地区）と弥生町（上野地区谷口・白山）・直川村等に多いが、それとても大野郡や直入郡の工藤姓には及ばない。あえていうなれば大野・直入地方は大分県における

工藤姓の本場である。もちろんこれには歴史的伝承があるわけで、大野郡緒方町の奥嶽川流域（旧長谷川村）がいわゆる奥嶽工藤氏の発祥地になっている。この奥嶽工藤氏は大友氏に由縁の深い「お下り衆」であった。ここで私たちは大野郡一帯が大神姓緒方氏一族の本貫であり、また緒方勢力に代って豊後守護職になった大友氏一族の最大拠点であったことを想起しなければならない。

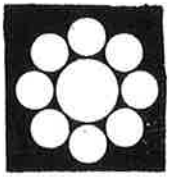
その緒方郷の南部山嶽地帯、奥嶽川河谷に工藤氏が住みついた。伝承では南北朝時代以後らしいが、はっきりしたことはわからない。もっとも工藤氏系図なるものによると、工藤祐経の次男時五郎が大友能直に従って豊後国に下り、能直の側近として刑部左衛門祐謐（すけやす）と称し、豊後工藤氏の祖になった。祐謐の後は府内にあって大友氏の旗下となったが、四代の孫工藤靱負祐国は大友家六代貞宗の末子兵部大夫行宗に仕えて宮方（南朝）に属した。建武三年正月、武家方（足利方）に属した大友刑部大輔氏時（八代・行宗の兄）のため行宗が殺されたので、祐国は行宗の遺児四郎丸を伴い大野郡の奥嶽に遁れた。この四郎丸が成人して祐国の養子となり工藤兵衛四郎親氏（法名道鉄）と名乗ったが、後奥嶽氏を称した。すなわち奥嶽工藤氏、つまり豊後の工藤氏は曽我兄弟の敵役である工藤祐経の後になっている。この工藤祐経は源頼朝の腹心で鎌倉幕府の声望家であった。そのため全国二十六カ国に三十三カ所の地頭職を兼任し、総所領三千七百八十五町におよんだという。建久四年（一一九三）五月、富士の巻狩のとき祐経が曽我兄弟に討たれた後子祐時があとを継いで父の所領を受けつぎ、以来伊東氏を称した。祐時（左衛門尉・大和守）が継いだ日向の所領は諸県荘四百五十町、田島荘九十五町、富田荘八十町、県荘百二十町、児湯郡二百四十町であった。これらの荘園のほとんどは宇佐宮領で、伊東氏はその地頭職である。

祐時は建長四年（一二五二）に死んだが、その前後に伊東氏の一族は日向に移住した。すなわち祐時の四男七郎左衛門尉祐明は田島荘（宮崎郡佐土原町）を、七男八郎九郎祐景は富田荘（児湯郡新富町）と県荘（延岡市の一部と門川町）を、八男余一祐頼は諸県荘内の絹分（東諸県郡国富町木脇）を領した。そして惣領として祐時の後を継いだのが六男祐光（左衛門尉）、ところが文永三年（一二六六）祐光が鎌倉に没し、その子祐宗が幼なか

ったので、祐頼が刑部左衛門と改め日向における伊東氏の名代（惣領役）となった。（伊東氏では祐頼を三代とし、祐宗を四代にする）

工藤祐経にはその後を継いだ長男祐時（犬房丸・伊東氏祖）と次男祐長（工藤六郎左衛門尉）があった。祐時の伊東氏については『日向記』などに記録されているが、祐長の子孫については記録に残るものがない。前述したように奥嶽工藤氏の始祖である祐謐は工藤祐経の次男と伝えられている。この言い伝えが正しいならば、祐謐は尊卑文脈の工藤氏系図にある祐長にあたる。（なお岡藩の奥嶽千石庄屋工藤氏の祖は奥嶽工藤の名跡を継いだ大友浪人工藤主馬祐尹の後と伝える）

藤の上り


曜の九

蛇の目

本来工藤氏は藤原氏南家、左大臣武智麻呂（むちまろ）の裔で、七代の孫常陸介維（これ）幾（ちか）の子木工助（もくのすけ）為憲に出ている。為憲は木工助と遠江権守を兼ねたが、自ら工藤大夫（木工助藤原大夫の意）と号した。為憲の孫維景（駿河守）にいたり伊豆国狩野に住み、工藤氏または狩野氏を称した。維景の孫が狩野九郎維次、その子が四郎大夫家次、家次の子が伊東武者祐次、その子が工藤左衛門尉祐経である。

この一族は伊豆の在庁官人で工藤介または狩野介と号した。例えば祐経の父祐次の弟茂光は狩野に住んで工藤介を称し、その子宗茂、孫宗時いずれも狩野介と名乗った。また茂光の弟家光は工藤四郎、茂光の次男維光は工藤次郎と称した。

肥後の相良氏も工藤大夫為憲の後であるが、その相良系図によると、為憲から三代目が時理（ときまさ）で駿河守・工藤判官代と称し、時理の弟維雄は工藤氏を名乗り河内工藤の祖になっている。また時理と維雄の間に時文があり、遠州相良の祖になっているが、この時文の子に伊藤駿河守時信、相良氏を継いだ維兼、遠江工藤の祖時金がある。そして伊藤時信の孫が陸奥前司維景、その子維純は崇徳院の四国配流に供奉して、子孫が四国に残りいわゆる四国工藤の祖になったとされている。

佐伯地方の工藤氏はどの系統か、にわかに断定はできないが、私は奥嶽工藤つまり豊後工藤の支系であると思

っている。しかし、工藤氏には藤原南家流以外はないわけだから、はっきり工藤大夫為憲の裔といってよい。家紋は「九曜」と「庵に木瓜」

◇　加藤氏も全国的な苗字

お名前博士といわれた姓氏研究家故佐久間英氏があげた日本の苗字ベスト二〇のなかで、加藤氏は第十一位、全国で約六十万世帯と集計されている。それでは佐伯地方（佐伯市・南郡）にどのくらいあるかというと、私の集計では佐伯市部約七十世帯、郡部約五十余世帯で、聚落的にあるのは弥生町小田の二十七世帯である。（昭和五十四年現在）

加藤氏は藤原氏利仁流が主で、鎮守府将軍利仁の孫加賀守吉信にはじまるが、この一族は斉宮寮頭藤原叙用（利仁の子）を始祖とするため斉藤党という。加賀守吉信の四代孫景道は加賀介になり、加賀の藤原氏との意から加藤と号した。この景道は源頼義の郎党七騎の一人である。景道の次男が加藤五景清（加藤次景貞ともいう）、その子が三人あり長男が加藤太景正、次男が加藤次景廉、三男が伊豫介光員である。このうち加藤次景廉は源頼朝の家人として治承四年（一一八〇）八月、頼朝が伊豆に挙兵したとき目代平兼隆を討取った勇士。加藤次景廉に景朝（遠山氏祖）、尚景、景長、景経の四子、あるいは景朝、景長、景経、景義の四子がある。また景廉の弟光員は伊勢国に住み、伊勢加藤氏の祖になった。

豊臣秀吉の子飼いの家臣であった加藤左馬助嘉明（後会津四十万石の藩主）は三河の人というが、その先は景廉の次男（または三男）景長（左衛門尉）に出ている。景長の子行景のとき甲斐に移り、五世の孫泰景が武田氏に仕えて曾孫景恒に至ったが、景恒の子景俊は三河に居住、三代を経て教明に至った。この教明の子が左馬助嘉明である。この加藤氏は嘉明の子明成のとき、徳川幕府に罪を得て一時封地を没収されたが、寛永二十年（一六四三）明成の子明友が家名を相続、石見国吉永で一万石を給された。その子明英のとき近江国水口で二万五千石となり、明治維新まで続いた。家紋は「下り藤」「蛇の目」である。

美濃加藤氏といわれる加藤光泰（初名作内・遠江守）も秀吉生えぬきの家人、長浜城主時代には腰母衣衆の筆頭といわれた。天正十年（一五八二）近江高島二万石の

大名にとりたてられ、十二年遠江守に叙任された。同十八年（一五九〇）小田原北条氏平定後、加増されて甲府二十四万石を領したが、文禄朝鮮の役で石田三成らと対立、二年（一五九三）八月帰国の途西生浦で急死した。長男作十郎貞泰は領国甲斐を没収されて、美濃国黒野四万石を支給された。貞泰は任官して左衛門尉、後左近大夫と称したが、関ケ原役に初め西軍のち東軍に属して所領を安堵された。慶長十五年伯耆国米子六万石に加増、寛永六年（一六二九）伊豫大洲に転封された。

この加藤氏は加藤次景廉の子景義の裔といわれる。景義、景定、景春、景平と世代は続き、景平八代の孫が権兵衛景泰、斉藤竜興に仕えていた。この景泰の子が作内光泰である。家紋は「蛇の目」を正紋とし「上り藤」「千木」を副紋にした。

秀吉と同郷で姻族の関係にあった加藤清正はいわば尾張加藤氏であるが、前述の兩加藤氏とは別系統である。清正公伝によると、関白道長（御堂関白藤原道長）の五男民部卿長家の子権中納言忠家の後といわれ、忠家の子正家が何かの事情で尾張国に下り居住、加藤氏を名乗ったものという。清正の父は弾正忠清忠、祖父は清信と伝えられているが明確ではない。一説には秀吉同様農民層の出で、尾張国愛知郡中村付近の鍛冶屋の子、幼名を夜叉若といったともいわれ、天正の初め帰郷した秀吉に伴われて長浜に行き、秀吉の正室祢々（北政所）に養育されたという。清正の通称は虎之助、任官して主計頭、後肥後守となった。関ケ原の役後、家康から肥後一国と豊後の一部（鶴崎地域）五十四万石を与えられたが、慶長十六年（一六一一）六月、五十一才で病死した。寛永九年（一六三二）五月、子忠広のとき幕府の忌諱に触れ改易された。家紋は「蛇の目」「桔梗」である。

このほか加藤氏には加藤次景廉の弟伊豫介光員を祖とする伊勢加藤氏、中臣氏族伊香布施氏流の近江加藤氏、また武田氏族の武田信繩の子信厚が称した加藤氏などがある。

豊後各郡にも加藤氏は多いが、いずれも加藤次景廉の裔と伝えており、郷土関係では佐伯惟教の家士に加藤五右衛門、旧藩毛利家の士で中小姓格に加藤保右衛門（加藤精一家）、足軽組に二家がある。ともあれ柵牟礼山下の弥生町小田に加藤姓の聚落があり、旧藩時代この中から祠官加藤加賀家が出たことは特筆してよい。この小田

の加藤氏はおそらく佐伯氏遺臣の流れであろう。なお佐伯地方の加藤氏には「下り藤」紋を用いる家が多い。

大友氏の歴代墳墓を巡る（四）

――四代親時・五代貞親――

古藤田　太
（会員・弥生町江良）

鎮西にあって、蒙古戦をとりしきった感のある第三代頼泰も晩年に及んでは、益々露骨になってくる北条氏の得宗政治に追立てらるゝようにして隠遁した。この北条氏の鎌倉幕府は弘安役（一二八一）後僅かに五二年にして滅びたが蒙古戦後の困難の時代に、四代親時、五代貞親、六代貞宗は活躍したのである。

戦後、御家人の間で訴訟問題が多発してきたが、各国守護に最後の裁決権が無かったために、鎌倉や京都にのぼってゆく者が多かった。このため、弘安七年（一二八四）―特殊合議制、弘安九年（一二八六）―鎮西談議所、正応六年（一二九三）―鎮西探題、永仁七年（一二九九）正月―鎮西評定衆、永仁七年四月―評定衆の補助機関として引付衆（この引付衆は補助機関とはいうものゝ、その筆頭ないし重役は有力守護が任命された）と鎮西探題を頂点とする軍事行政・裁判の機構がようやく形成された。このことは従来の鎮西の有力守護少弐、大友、島津氏の権限が奪われることでもあった。この引付衆の中に、第三番筆頭に大友貞親の名が見える。大友氏は頼泰後もその実力は高く評価されていたのである。然し歴代大友氏を眺めるとき、親時、貞親についてはよく知られてない。『大分の歴史』『大友物語』でも余り触れられていない。根拠となる史料が極めて乏しいのである。

㈠ 四代　大友親時の墓